人間は創造主に似せて造られた

2010 年 10 月 20 日
佐々木正明

1 人間は創造主に似せて造られた

人間の中にある創造主の本性

聖書は、人間が創造主である神に似せて造られたと教えています。それは誰にでも分かるように、創世記の初めの部分で強調されています。人間は創造主に似せられているのですから、本質的に美しく、正しく、聖く、優しく、憐み深く、恵みに富む、善なるものです。また人間は創造主に似せられた霊的な存在であり、霊である創造主の存在を感じるだけでなく、創造主の愛を喜びまた自分の愛を捧げて、交わり持つことができるように造られています。これらのことはみな、人間を他の動物とは異なるものにしています。他の多くの動物も、創造主に似ているところはたくさんあることでしょう。しかし、人間は特別に創造主に似たものとして造られたと、あえて明確に強調されていることが重要です。人間の道徳観や倫理観は、他の動物に与えられている行動本能とは異なり、創造主である神の存在を意識する、霊的性格に支えられているのです。単なる仲間同士の行動のパターンを制御する程度の、いわゆる社会的動物の道徳や倫理を超えたものなのです。人間は見えない誰か、人間の感覚と思考の遥か彼方に存在する、畏るべき誰かが、自分の行為行動を常にご覧になっていると感じています。そしてその感覚によって自分の行動を制御しているのです。

人間の堕落した性質と霊的な死

一方で創世記は、間違いようがないほどはっきりと、人間が罪によって堕落したことも教えています。 罪のためにいのちの源である神との交わりが断たれ、「人間としての命」が損なわれているために、人間は人間としての本来の生き方ができなくなっています。生物学的な命、動物としての命は持っているのですが、霊的な命の源である、創造主との関係が大きく傷つけられているために、創造主からの霊的命を充分に受けることができなくなって、「霊的に死んだ者」となっているのです。せっかく創造主に似せて造られていながら、その

美しい本性を思うように発揮できないのです。そのために、人間の世界は醜いもので満ちています。人間のあらゆる不孝は、人間が罪によって堕落したことに始まると、創世記は教えているのです。罪のために、絶対に聖いお方である創造主から隔てられ、歪められ破壊された人間性に翻弄されて生きるようになったのです。

人間の肉体にまで及んだ堕落の結果

　人間の罪の結果は、単に人間の霊的本質、あるいは倫理的道徳的性質にまで及んだだけではなく、肉体にまで及んでしまいました。罪を犯すまでの人間は、肉体的苦痛を経験することはありませんでした。罪を犯す前の人間にも、自然を管理するための様々な労働がありました。しかし、そこに激しい疲れや苦痛はなかったのです。かえって、創造主にお仕えする喜びがあふれていたはずです。ところが罪のために、人間の肉体には苦痛と病や怪我や疲労などが押し寄せるようになったのです。それを創世記は、女が子を産む苦しみと男の労働の苦痛とで表現しています。

自然界にまで及んだ堕落

　聖書はまた、罪の結果が人間だけではなく、自然界にも及んでいることも教えています。人間は自分の罪のために破壊されて、猛々しくなってしまった自然に苦しみながら、その中で生きることを余儀なくされたのです。現在見るような天変地異の世界、自然災害と病の世界は、すべてが「良い」と、天地創造のとき創造者ご自身が判断された、調和がとれた美しく柔和な世界ではなくなってしまったのです。そこに歪められた本性で醜くなった人間が、さらに様々な破壊と混乱をもたらし、いよいよ荒れた住みにくい自然界となり続けています。使徒パウロによれば、この破壊された自然は、贖われる人待ち望んでいるのです。(ローマ)

消滅してはいない神の姿

　とはいえ大切なのは、人間が霊的にも道徳的にも、また倫理的にまったく堕落しきったのではないことです。私たちの日常生活を見てもわかることです。さらに、自然界も完全に破壊されてしまったのではありません。今でも太陽を昇らせ雨を降らせてくださるのは創造主です。罪によって堕落したとはいえ、人間は創造主によって与えられた性質、すなわち創造主に似た本質を、ことごとく失ってしまったのでもありません。それは聖書に明らかに記述されていることです。罪に壊され、歪められ、弱められているのは疑いようもありませんが、人間はまだまだ創造主に似ているのです。どんなに悪い人間でも、必ず良いものを秘めており、反対に、どんなに善良な人間であっても、罪のために破壊されて歪められた本性の

ために、必ず罪を犯すのです。それが人間です。さらに人間は人間である限り、宗教心をもって何かを礼拝したいという、本能的欲求を持っています。創造主から離されているために、その宗教心は偶像礼拝という誤った形で現れてくることが多いのですが、宗教心だけは消失していないのです。創造主に与えられた創造主の性質を持っていながら、それを生かすことができないという悲劇に、人間は生きているのです。

創造主の自然を通しての自己啓示

　創造主であるお方は聖いお方ですが、このような状態に置かれている人間に対して、怒り狂っておられるのではありません。あるいは無関心になってお忘れになり、放り投げてしまわれたのでもありません。かえって人間が、ご自分に似た本来の性質を生かし、霊的には創造主を認めて礼拝し、道徳的にも気高く聖く、倫理的には善を尊び正しく哀れみ深い生き方をすることを望み、期待しておられるのです。ノアの時代の洪水やソドムとゴモラの滅亡、あるいはニネベへの裁きの宣言も、イスラエル人だけではなく、異邦人たちも、自分の中にある創造主の性質を生かして、生きることを望んでおられるからこそ、厳しい裁きが下されたのです。それらの裁きは、イスラエル民族に対するものではありません。でも裏を返せば、創造主は彼ら異邦人にも、人間としての道徳的・倫理的責任を問われたのです。たとえ堕落後であったとしても、人間には自分たちの行動に対して責任を問われるだけの、神の姿が残っていたということです。霊的な意味でも、ご自分から離れたところで文化を築き上げ、ご自分のことはすっかり忘れてしまっていたかのような人間に対し、被造物を通して、すなわち自然の中にご自分を現し続け、少なくても人間が、創造主の本質的な姿を理解することを期待し、人間が創造主だけを礼拝するようにお望みになっています。創造主は堕落した人間に霊的な可能性を見、その責任を問うておられるのです。

創造主の自己啓示を理解しなかった人間と偶像礼拝

　ところが人間は、創造主のそのような思いをまったく理解しなかったようです。自然を通してご自分を掲示しておられる、創造主の本質に気付くこともありませんでした。かえって自分の知性を誇り、それに溺れて、人間や鳥や獣や地に這う物を模した偶像を造って、これを拝む偶像礼拝に陥り、ますます創造主から遠ざかってしまいました。そのために創造主は、人間をその愚かさと欲望のおもむくままに、お任せになったのです。創造主の失望の大きさがうかがい知れます。その結果人間はますます罪の奈落に落ち込んでしまいました。現在の私たち人間の醜悪な世界は、単にアダムとエバの罪の結果だけではありません。創造主の自己啓示を無視した、人間の偶像礼拝に対する裁きの結果でもあるのです。それは第二の堕落とも呼ぶべき重大な出来事でした。自然を通してご自分を掲示しておられる創造主の、まことの姿を理解せず、被造物を礼拝の対象としてしまったのです。

偶像礼拝の罪はすでに裁かれている

ところで、この人間の偶像礼拝の罪は、すでに裁かれていることに気付かなければなりません。人間が心の欲望のままに汚れに引き渡され、道徳的廃頽と無秩序の中に生活するようになったのは、偶像礼拝の愚行に対する裁きだったのです。ですから私たちは今、偶像礼拝の裁きの中に生まれその中に生きているわけです。人類全体が偶像礼拝の罪のために裁かれたり、裁きを宣告されたりしている聖書の記述は、このローマ書の一カ所だけです。

聖書が言及している偶像礼拝の罪は、ほとんどが、ユダヤ民族という特異な人々に関わるもので、異邦人、すなわちユダヤ民族以外の人々には関係のないものです。わずかの例外は、偶像礼拝の悪習慣をユダヤ社会に持ち込む危険性があった、近隣に住む異邦人に対するものです。ノアの時の洪水にしても、ソドムとゴモラの滅亡にしても、ニネベへの警告にしても、彼らの偶像礼拝の罪に対する裁きではありません。むしろみな偶像礼拝の罰として、欲望のままに任せられた結果としての、道徳的腐敗、倫理的廃頽が極限に及んだためです。偶像礼拝は創造主が最もお嫌いになる罪ではありますが、一方では人間が神の姿に似せて、霊的な存在として造られている証でもあるのです。目に見えない気高い大きな存在を感じて、何かを礼拝したいと願うのは、まさに霊的存在として造られた人間の本能であって、決して否定されてはならないものです。ただ礼拝の対象が誤っていることが罪なのです。

ユダヤ人に対する偶像礼拝の禁止と裁き

ユダヤ人の偶像礼拝の罪は、非常に厳しく裁かれています。それはユダヤ民族が、一つの大切な目的のために、創造主によって特別に選び出された人々だったからです。創造主の目的は、罪によってご自分から隔てられ、霊的な命を失ってしまった人類を、ふたたびご自分の許に引き寄せ、新たに命を与えることでした。その人類救済の計画遂行のために、創造主はユダヤ民族を選び出し、それでユダヤ民族には、自然を通して間接的にご自分を啓示なさっただけではなく、直接ご自分を現わし、律法を与え、助け、導き、訓練し、時には厳しい刑罰をあたえ、全人類の救い主を迎え入れるにふさわしい民族に育てようと、あらゆる努力をしてくださったのです。

中でも特に大切だったのは、天地の創造主、人間をご自分に似せてお造りになった創造主だけを礼拝するという、この一事でした。そのために明白な偶像礼拝禁止令が与えられ、違反者には厳格な裁きが執行されたわけです。でもその厳しい偶像礼拝禁止の命令が、異邦人に適用されることはありませんでした。聖書は、律法のないものは律法なしに滅びると教え、ユダヤ人に与えられた律法（この場合は旧約聖書）が、他の民族に及ぶことはないことを、疑いの余地がないほどはっきりと示しています。ですから、ユダヤ人の先祖でありながらまだユダヤ人とはなっていなかったアブラハムの考え方や行為には、まままだ異教徒の名残

がありました。ヤコブが、自分たちのテント集団から偶像を取り除いて廃棄処分にしたのは、アブラハムが召されてからおよそ１５０年も経ってからのことです。異邦人の偶像礼拝に対する創造主の取り扱いは、意外に忍耐深く寛容であったのが分かります。

人間をご自分の姿に似せてお造りになった創造主は、いま、偶像礼拝をしている人間を滅ぼそうとしておられるのではありません。むしろ、彼らをもう一度ご自分の許に引き寄せ、新たな命を与えようと望んでおられるのです。彼らはすでに神の御許を追い出され、霊的には死んだものだからです。そのために救い主を送り、人々の罪を負わせ、磔の刑に処してくださったのです。

[1] 創世記 1：26－27
[1] 創世記 3：1－4：16
[1] マタイ 4：16，8：12、ルカ 9：60、ヨハネ 5：25、エペソ 2：2，5，14、コロサイ 2：13、参照ヨハネ 15：1－8
[1] 創世記 3：17－24、ローマ 8：19：22
[1] マタイ 5：45
[1] 創世記 6：1－8：22、創世記 18：16－29、ヨナ 1：1－4：11
[1] ローマ 1∶17－24
[1] ローマ 1：26－32
[1] 創世記 12：1－3、18：18－19

【関連する記事】
日本人の心に記された律法と日本人の宗教意識